広報を支える方たちにききました

「広報たかはま」どう思う？

目の不自由な方にむけた『点訳広報』と『声の広報』はボランティアの皆さんにより作成されています。また、「市民記者」はさまざまな行事に出かけて写真を撮影する『広報たかはま』の協力者です。『広報たかはま』の発行を新年度から月１回にすることを含め、広報活動の効果的な展開を検討するなかで、『広報たかはま』を支える方に活動のなかで感じたことなどをききました。

皆さんの声を広報活動の充実にいかしていきます。

難しいことも知らせるのが広報の役目

『点訳広報』は点訳サークル・モビールの皆さんが作成し図書館で閲覧できます。

約20年も活動している杉浦加津江さん（論地町）は記事入力のために毎号しっかり目をとおすといいます。「１日号の表紙がカラーになったとき、きれいになって嬉しかったけど費用はだいじょうぶ？と少し心配してしまいました。点訳する記事は、高齢な方に向けて選び、高浜市ならではの話題は楽しいので『カメラレポート』や『まちの話題』はかならず入れるようにしています。専門的な記事は難しいですが、それでも知らせるのが広報誌の役目だと考えて作業しています。点訳広報を必要とする方がいるうちは続けたいです。」と話してくれました。

専用プリンターで打ち出しを担当する、モビールのメンバーの岩田さんと石川さん。「広報はけっこう時間をかけて読むよ。」（石川さん）「私はサーッと読むかな。（笑）」（岩田さん）楽しそうな活動風景です。

文章が硬くて難しい／読み手の興味をひく話題を

ボランティアの加藤さん、酒井さん、神谷さん、楠本さん

『声の広報』はボランティアさんが各号を受け持ち、カセットテープに吹き込んでいます。

「『広報たかはま』は文章が硬くて難しいように感じています。聞き手は理解できるのかな?と思うときがあります。」「『まちの話題』などの記事は利用者さんも興味を持つのではと思うのでかならず読むようにしています。」「担当の号以外はななめ読みしていましたが、本当はすみからすみまで読んだ方が自分のためになるなと最近思うようになりました。」という意見をいただきました。聞き手の方の年齢を考えて記事を選んだり、季節感を出したりと工夫しています。テープは利用者の方に届けるほか、図書館で貸出資料になります。一度利用してみてはどうでしょうか。

もっと中身の充実を／使える情報を期待

『市民記者』の村松輝一さん（八幡町）からは「昔の広報の方が中身が濃かったような気がします。今、高浜市誌の編さんにも関わっていますが、昭和30年代の広報誌がとても役立っています。生活に身近な情報がしっかり載っていたからだと思います。記事内容の充実にもっと力をいれてほしい。」と指摘がありました。同じく廣田久雄さん（神明町）は「実家の方の広報紙を見ることがありますが、掲載記事の内容をくらべてみても催し物の案内もわかりやすく、写真も多くて楽しく読めるので『広報たかはま』の方が好きです。市内散策の参考に使うので、これからもいろいろな情報を掲載してください。」と話してくれました。

▲廣田さん
「市民記者」の腕章をつけて撮影した写真は『広報たかはま』など市からの発信に使うことになります。

▲村松さん

問合せ先　㊢総合政策グループ　☎52-1111（内線365）